15

吉雄流外科 1　瀉血篇

板野　俊文
香川大学

江戸中期の大通詞であった吉雄耕牛とその弟蘆風が開いた成秀館で全国から人を集めて医学教育が行われた．当時の著名な蘭学者の多くはここで学んでいる．その中で外科に関する講義と実習が行われたが，これを吉雄流外科（内科もあったが）という．しかし，その実態は不明な部分が多い．教科書としては全国で吉雄流膏薬，油藥，水藥が残されているが，これらから外科の内容を覗うことはできない．何故そうなったのか？ 当時，禁制と考えられていた病理解剖をおこなっていたため，外科手術などの詳細は門外不出とされた．しかし，成秀館の聴講生のひとりで讃岐の医家であった合田強とその弟大介の講義録等を読むと，吉雄流外科の内容がわかる．それらの中から外科に関する部分を抜き出し解説を行う．今回は瀉血（取血），刺絡篇である．

瀉血療法の歴史は古く，古代ギリシヤのヒポクラテスの時代にまでさかのぼる．18–19 世紀にかけて欧米では盛んに実施されたが，19 世紀終わりには一旦衰退した．1970 年までは，ほとんど報告がない．しかし，1970 年以降見直され，徐々に報告が増えていく．ことに 1990 年以降は急速にその報告が増えている．70 年代は主対象疾患が多血症，遺伝性ヘモクロマトーシス等であったが，後に慢性 C 型肝炎，非アルコール性脂肪性肝炎に対する適応が増えたからである．

本邦におけるよく知られている刺絡の記載は『蘭学事始』である．

> 明和四五年の間なるへし（中略）此「カランス」ハ博学の人「バブル」ハ外科巧者のよしなり　大通詞吉雄幸左衛門ハ専ら此「バブル」を師としたりと（中略）此年も蘭人に付添来れり　翁夫等の傳へ聞しゆへ直に幸左衛門が門に入り其術學へり　これによりて日々彼客舎へ通ひたり　一日右の「バブル」川原元伯といへる醫生の舌疽を診ひて療治し且刺絡の術を施せしを見たり　扨々手に入りたるものなりき　血の飛び出す程を預め考へこれを受るの器を余程に引はなす置たるに飛□の血てうど其内に入りたりき　是れ江戸にて刺絡せしの始なり

吉雄耕牛とバブルの江戸参府は宝暦 11 年（1761）なので，この記載は間違っている．なお，合田強がこの講義録を書いたのは宝暦 12 年である．

刺絡に関する記載は総論として書かれた『紅毛医言』（以下医言と略）と，講義録の『西洋医述　巻三』（以下　巻三と略）にでてくる．

医言は出版を意図されて書かれたと思われ，序文は永富獨嘯庵による．また自序と凡例の後，最初に「取血（アヽデルラーテン）」として書かれている．取血の方法，取り方，対象疾患，等の記載がある．強がこの手法に強く惹かれていたことが分かる．

巻三では具体的な方法を，図を交えて詳述している．ここではタイトルのみを列挙する．

口中　舌下ノ筋（血管）ヲキル　陰茎取血法　舌ノカイル筋ヨリ血ヲトル　尺沢取血法　首筋ヨリ血ヲトル　足取血法　等である．

なお此等の原典を探索中であるが，その一部はローレンツ ハイステルの“Institutiones Chirurgicae”と思われる．しかし，不明な図もあり現在検討中である．